

放鶴

モ有レバ、彼代ニ此法ハ御停止可有コトナリシヲ御老中杯ノ了簡ノ著ク可成略○下

〔寛政四年武鑑〕尾張大納言宗睦卿○尾張名古屋 時獻上月十二鶴 紀伊中納言治寶卿○紀伊和歌山 時獻

上寒中鶴 水戸宰相治保卿○常陸水戸 時獻上寒中鶴 松平出羽守治郷○松江 時獻上十月鶴

松平肥後守容頌○陸奥津會津 時獻上八月初鶴 松平陸奥守齊村○陸奥仙臺 時獻上暑中初鶴

〔三養雜記〕四頼朝卿放たまふ鶴

鎌倉由比が濱にて頼朝卿の鶴を放たまふこと世にあまねくいひ傳ふれど、吾妻鏡をはじめ正

き記録にかつて見えたるものなし予○山崎美成が管見にては、本朝食鑑源二品之放鶴亦暨五六

百年來往于駿遠之田澤、偶觀之者謂翼間有金札、記年號支于云○中これらのこと、もしは後人の

俗説によりて傳會したることにやともおもはれて、其實はいかにかあらんと疑をりしに、過し

頃頼惟柔の此鶴を詠る詩を、石田醒齋がもとにて見たり、彦根侯嘗射一鶴、足有金牌、認其年紀、源

右大將所放、侯視而感悼、瘞之湖北某邱、有鶴塔、余聞此事爲作長句、江州刺史田獲鶴、繫金牌、在左

脚、題曰建久某々年、刺史視之、忽慳愕、爲營兆、壙刻誌銘云々、この詩によりて年來の疑ひ一時にと

けたあり、世人のいひつたへたるも、故なきにはあらず、頼朝卿真蹟の日記とて、影鈔本を藏する人

記は近頃ある人の作し偽書なり、

〔倭訓栞都前編十六〕つる○中 日光山に豊太閤の放たれし鶴三三羽、野に四季遊○中に居て他に行

かず○下 桃源遺事五西山公○徳川光圀 御山莊は、取分侘たる御事也○中伊御門田○中は鶴三○中給ふ

かの鶴も、西山公へ能なつき奉り、御門を御出候得ば、遠方直あたふ候ても、忽ち御側へ飛來り候

〔宜禁本草坤〕鶴血 鹹平無毒、有玄有黃、有蒼有白、白者爲良、益氣血、補勞乏、去風益肺

〔本朝食鑑五〕鶴和名可各 反訓豆流

鶴利川